文献資料紹介

《第77回》

【三国名勝図会 神社・仏寺の項 抜粋】

山本秀雄

『三国名勝図会』は、昭和六十一年発行の本誌第二号に紹介したが、紙数の関係もあり、目次と本文導入部十数行を掲載するに留まった。そこで今回あらためて巻之五十「屋久島」の中から神社・仏寺、および旧跡の一部（如竹翁墓）を取り上げることにした。

『三国名勝図会』については、熊本の青潮社から復刻本が刊行されるに当って、『南日本新聞』（昭和五十七年十一月十八日付）に詳細な紹介記事が掲載されたし、また現物によってその内容は大方ご存知のことと思うが、ここにその記事を抄出すれば、

薩摩第二十七代藩主島津斉興の下命で、天保十四年（一八四三）に五代秀堯・橋口兼柄等によって編纂された全六十巻の歴史・地理書で、薩摩・大隅および日向の一部にわたる三国の自然・社寺・物産などについて記述しており、薩摩藩の研究書として最も権威ある書物である、と記されている。

旧号記事と重複するが、明治三十八年島津家臨時編輯所発行の同書、巻之五十「屋久島」の目次を再掲すれば次のとおりである。

三国名勝図会巻之五十目録

大隅国馭謨郡

屋久島

総　説

島名の諸字　郡の分合　授位賜物　郡司乃制外　掖玖　島主　闔島形状　風俗島民の生業山中の神異

山　水

八重岳　宮之浦　宮之浦川　宮之浦岳　益救神祠　御船岳　刀折岳　羽神瀑布　危ひ石　銭亀石　碁石ヶ浦　安房川　天柱石　天柱岳　面影水　用水川　尾之間温泉　平内温泉　花の江川　栗生川　栗生岳益救神祠　珊瑚沙渚　長田川　長田岳益救神祠　一湊一湊川布引滝　箭筈山　八幡窟　六港　永良部島

橋　道

切渡橋

神　社

益救神社　盛久権現社　天満神社　神社合記明儀神社・住吉神社・八幡神社・葉山神社・中島権現祠

仏　寺

法華宗の権輿　久本寺（番神堂）　釈迦堂佛寺合記

旧　跡

古城合記　如竹翁墓如竹翁遺文・如竹翁詩・藩相の書翰・如竹翁伝

羅馬国人の事蹟

物　産

土石類　五穀類　薬品類　蔬菜類　果実類　花卉類　樹木類　飛禽類　走獣類　鱗介類

叢　談

遣唐使漂着

以上が巻之五十「屋久島」の目次である。

『三国名勝図会』が薩摩藩の研究書として、権威ある書物であるというは、事実「屋久島」を八つの項目に分け、さらにそれぞれを細目にした目次を見るとき、身近に置いてくり返し読むにふさわしい郷土史であるをうかがい知られよう。巻五十は目次が三ページ、本文が九十二ページから成っている。

神社、仏寺の項は以下のとおりである。

三国名勝図会

神社

益救神社

宮之浦村にあり。祭神一座、彦火々出見尊是なり。円石二ッ有て神躰とす、隅州神社考、本府大磯蛭兒宮の條に、屋久島の神社は蛭兒を祭り、益救神社と号すと云へり。延喜式神名帳曰、大隅国馭謨郡一座小、益救神社と記されたり。俗に一品宝寿権現と称ず。或は須久比神社と称ず。然れども須久比は、益救の訛なりといふ。蓋し救の一字を訓にて称ぜしならん。古来此所の地名を宮浦、又は一品ヶ浦、一品ヶ浜と呼ぶ。是其神社の鎮座せる故なり。社山の周回十二町、其山上に神社あり、俗に権現堂といふ。例祭十一月二十四日、久本寺より役す。当社は往古より此浦に鎮座せしに、中古以来、闔島都て法華宗になり、寺外の神社仏閣等は尊重せざる風俗となりて、此神社も自然と廃壊し、宮浦には跡形もなかりしとなり。然に本府の士、町田孫七忠以、屋久の宰官 此時世、宰官の名を、抑といふ。となりて、貞享元年甲子八月より、宮浦に来居て、謂らく、屋久は古来霊山の地なるに、其名のみにて、かく神社の廃したるは、淺間しと歎息し、此所の老人共を呼集め、此処彼処と考察して、神社の遺跡を尋出し、社堂を造営し、土人に勧て、同三年寅正月元日より、参詣を始たりとぞ。此神社新建の事は、町田孫七徐堯和尚へ遣せし、下の釈迦堂由緒を記せる書翰に拠る。この益救神社は、宮之浦のみならず、御岳の巓三ヶ所、及び島中所々に勧請せり。然れどもこの浦、及び三岳に鎮座せる者、本社なるべし。

盛久権現社

安房村南の方、大河の隔岸八町許にあり。所祭一座、主馬判官盛久を崇む。往古安房村の地、井平河といふ海上へ、怪しき船ありて、神の河崎と云所へ着たりと見えしに、其船何くに去たるもしれざりけり。土人奇怪に言触しける、いまだ日を歴ざるに、黒石と云所の農民、一日小兒を盥盆にて浴しけるに、俄に気絶しけり。然るに忽然として異人来て曰、此山に主馬判官盛久の霊を祭らば、小兒蘇生すべしと。行方しらず失たりしに、小兒間もなく蘇生しける、闔村相議して、祠堂を建、盛久を神に崇め祭けれども、時々怪事等ありければ、亦仏体に崇め改めけるに、是より怪事止けるとなり。俗に盛久権現と称じ、此村の宗社とす。例祭九月十九日。

天満神社

楠川村にあり奉祀天満神三座。往昔海辺大木の根に円石あり。神体と崇めけるに、享保十五年庚戌正月九日、村民華表を造立し、其匠人酒を神に薦めて、且群飲し、酒を煖けるに、酒提の内に、白銀二枚忽然としてあり。闔村神の賜ものなりと歓喜し、村吏代々次渡て宝蔵しけるが、元文四未年、横目九十郎と云へる者の代に、相失して、尋索しけれども知れざりけり。然るに翌五年申五月十七日、未の刻、其神祠の前、長瀬といふ所の傍に、一木像流来れり。土民次郎右衛門なる者の母、見当りて取挙たり。闔村の民聚観しけるに、天満神の像なりければ、踴躍歓喜しけり。其後木像を本府に遣して、設色し、正堂を造営して勧請し、宝暦十三癸未二月、拝殿を建立せり。其流来れる木像は、三座の内、其右位の像にて、高さ三寸、中央と左位の二像は、新作にて、其後勧請せり。例祭五月五日、六月廿五日。久本寺及ひ本蓮寺より勤行す。

神社合記

明儀神社　小瀬田村にあり。海辺に松林欝然たり。大山森といふ。△住吉神社　志戸子村にあり。此村及び諸村より参詣する者多し。△八幡神社　平内村にあり、当社霊応顕著なりとて、土人恐怖す。△葉山神社

栗生村、栗生川の河口にあり。社地松林欝然として、風景佳なり。△中島権現祠　安房村に属す。村落より西方、四里許にあり。安房川の上流に中島あり。島上に石の小祠あり。因て中島権現といふ。土俗霊地と称して崇敬す。毎年八月彼岸、男女参詣する者多し。

仏寺

法華宗の権輿

島中仏寺は、皆法華宗のみにて、他宗なし。人民尽く法華宗を尊信して、僧徒を恭敬す。常に法華経の題目を唱ふ。又題目講と云こと有て、村民寺院の僧を召請し、衆人相会して題目を唱へり。山中の猟、海上の漁、大小の病及び吉凶禍福等、一切の万事に通じ、題目を唱へて祈禳せり。島中往古は都て律宗なりしに、文明年中法華宗の僧日良と云者、島に渡って法を弘めたりしに、是より闔島尽く法華宗になりしといへり。宮之浦村久本寺の旧記曰、益救島は、往古都て律宗なりしに、文明の比より法華宗となれり。亨徳年中、種子島の律僧義賛房なる者、南都興福寺に至り、修学すること六年、其後本國に帰る。途中にて法華の徒権大僧都日隆上人 原註に曰、日隆上人は、尼崎本興寺、京都本能寺の開山。に逢ひ、法華経の妙旨を受て、即ち浄源院日典上人と名を改め、寛正二年、本土に帰り、法華を弘めけるに、島主種子島時氏 第十一代の人 少しは帰依ありけれども、其父幡時 第十代 全く帰依なかりける。日隆の弟子浄光院日良上人、此由を聞き、寛正六年、彼島へ下り、法華を説き弘めたりしに、文明元年比には、種子、益救、永良部の三島、尽く法華宗となる。然れども益救岳の権現嘉納なき故にや、八重岳時々震動し、種々怪異絶えざりしかば、土民心を安んぜず。是に因て長亨二年、日増上人、長田村に渡り、長寿院 此院今に長田村にあり。より使僧を以て、妙法蓮華経の法札を、御岳に納め置しに、其使僧山中まで帰り来る比、其法札、旅院に飛返りしなり。第三度に至り、日増親ラ岳に登り、法を説て納めたりしに、宝殿鳴動し、白鹿忽現して、日増を礼し、忽然として見えず、是より闔島今に至りて怪異なし。種子、益救、永良部の三島は、悉く日典、日良、日増の、開基なり。似上原文の略抄。

長遠山久本寺

宮之浦村にあり。京都本能寺、攝州尼ヶ崎本興寺の末にして、法華宗なり。本尊釈迦如来、多宝如来。座像、又左右に不動明王、愛染明王、及び四天王等を安置す。開山金剛院日増上人なり。此村の祈願菩提所なり。種子島時氏創建せり。享保十六年、本堂より火起り院房尽く焼亡せり。其時寺内の宝物諸記録等、皆其災に罹りし故、今に島中諸寺の由緒詳ならずといへり。其後本堂再建して、享保十八年癸丑十一月、成就すと記録に見えたり。

○番神堂　本堂の前にあり。南に向ふ。本尊鬼子母神、十羅刹女、凡そ十一躰 木像なり。右位には三十番神木像三十体、左位は日月星木像三体、及一品法寿権現位牌を安す。享保中、本堂焼亡せし時、此堂は災に罹らずとぞ。初め寛文四年、建立してありしを、宝暦四年再建せしと、記録に載せたり。

釈迦堂

宮之浦村にあり。一林叢ありて、釈迦堂山と呼ぶ。釈迦如来 木像、高さ六寸、唐木にて作る。を安置す、久本寺より管轄す。往昔は五本松と云ふ所にありしを、今の地に移す。其由緒を按ずるに、貞享三年正月元日、島の宰官町田孫七忠以、官署に在て、其賀客に対して曰、今島中寺院の外に神社仏閣あることなし。何とかして、造営を始め、古代の如く繁昌すべき様に計るべし。何の仏にてもあれ、木仏一体、此海辺に浮来らざる者哉。然らば彼五本松の下に、一堂を造営して、土人に信仰さすべき者をと偶然の

話をなせしに、其春二月十五日、天気晴朗なりしが、楠川村の少女二人、相伴て海辺に出たりしに、一人の女愕然として曰、海中に何か怕しき光物ありと。二女熟視するに木仏なり。即取帰りける。其二親是を宰官へ出しければ、孫七其仏像を査照しけるに釈迦如来なり。久しく海中に浸り居たると見えて錆生じたれども金色鮮かにして著色も落ちず。十指の爪先までも損したる所なし。孫七元日賀客に語りし言を思ひ、天の賜ものなりと歓喜踴躍し、其年此像を本府へ遣し、大言公に上りしかば、公親ら見て感歎をなし、其像を還し給ひ、命を下して、宮之浦へ一堂を建て安置せしむ。同五年戊辰五月、宮之浦の東五本松に一堂を造営し、其像を安置しけり。同六月六日、闔島諸寺の僧、相集て供養の法式を勤行せり。貞享五年、釈迦堂造営の初、島の東安房村の海辺に、長さ二間許、廻り五六尺程の材木二本流寄しに、其木見馴ざる良材なりければ、即ち官許を承て、仏壇等に用ひけり。同年八月十八日、大風なりしに、釈迦堂五松の内二株、土際より、吹折しに、其二松此堂に倒れ、七八尺許りなる大木なるに、左右に避落ち、堂の損ぜざるありさま、人皆神異なりと云はやしけり。かかる事ども、其前後種々ありければ、土民霊像なりとて、敬仰せるとぞ。其比漢土揚子江の金山寺 金山寺は揚子江といふ大江の中に島嶼あり、其島嶼にある寺にて、名刹なり。洪水出て、寺院崩流しけることありて、此釈迦像は、彼寺の仏像なりしとかや。漢土より数百里の海上を浮来る、誠に珍異の像と云つべし。

仏寺合記

本寿寺　栗生村にあり。△本隆寺　一湊村にあり。△本仏寺　安房村にあり。寺内如竹翁の墓あり。下條に詳なり。△顕寿寺　△長寿院　△蓮華寺　以上三ヶ寺、皆長田村にあり。△本蓮寺　楠川村にあり。△光照寺　小瀬田村にあり。△本要寺　船行村にあり。△本住院　原村にあり。△本経寺　尾野間村にあり。△典良院　小島村にあり。△岩勝寺　平内村にあり。△隆泉寺　湯泊村にあり。△中間寺　中間村にあり。△本堯寺　志戸子村にあり。△本満寺　吉田村にあり。△本慶寺　麦生村にあり。本寿寺以下顕寿寺に至る四ヶ寺は、京都本能寺、攝州尼ヶ崎本興寺、両寺の末なり。其外の諸寺は、当島久本寺、及ひ本慶寺以下、四箇寺等の末なり。今分て是を記さず。悉く法華宗に係る。本尊は、皆釈迦多宝の二躰にて、各村の祈願菩提所を兼帯す。此諸寺由緒の記すべきなしといへども、是を挙て仏寺の数を示す。

旧跡

如竹翁墓

安房村、本仏寺の内、諸人墓地の入口にあり。寛陽公より命ありて建といふ。土人参詣する者多し。石塔の形、上に笠石あり、中に竿石あり。其高さ三尺余。下に一重の台石あり。竿石の中央に、養善院日章霊位、右の側に、明暦元年、左の側に、五月十五日とあり。石塔左面竿石の中程に、⊕如此の形に彫刻してあり。土人の伝へに、如竹といふ字のくづしなりといへり。又卍字ならんと云説もあり。如竹翁所蔵なりとて、硯石一面、本仏寺に残れり。又翁の墓とて、安房村の中程河畔にあり。其塔五輪にて、台石三重あり。東に向ふ。其死体を真に葬りし所と云伝ふ。翁終に遺言し、此所に石塔を建つべし、我鎮守となり、此村の災殃を滅せんと言はれしとぞ。如竹翁の遺文及ひ詩等、本府及び屋久島を探索するに、翁平素著述を好まざれば、残簡断編幾もなし。其片言を見ても、其心志を知るべきなれば、其得たる者を左に載す。世久して、泯没せんことを慮てなり。

やまもと　ひでお　上屋久町歴史民俗資料館館長